



日本農業気象学会
農業気象用語編集委員会編

農業気象用語解説集

日本農業気象学会, 1986
B 6 版, 327頁, 2,900円

日本農業気象学会は戦前に創立され、すでに40有余年の歩みを続けているという。初めは農業の気象災害への対応などに限られていた研究テーマも、その後、接地層での放射収支の問題や、さらには環境調節など、気象制御の技術開発の問題なども加わって、今日、その研究領域は著しく学際的になって来ている。このため、関連分野についての専門的知識を手軽に与えてくれる用語解説テキストが強く要望されていた。このような期待に応えるべく、同学会が、5年の歳月をかけて生み出したのが、この用語解説集である。

採用用語は、その内容によって12の大項目に分類されている。すなわち、「天文・天気、気候、放射とエネルギー収支、微気候、土壌物理、農作物と気象、農業気象災害、環境調節施設、施設の構造、環境調節法、観測・統計、測器」である。そして、この各項目の中で用語は50音順に並ぶ。

中には、これが気象とどんな関係があるのかと思うような語もあるが、私にとっては、なかなか面白かった。たとえば、建築でいう「フーチン」というのが“footing [futing]”のことだというのを、私はこの本で知った。また、日射量が十分にある日中に、植物が「ひるね現象」を起こすこともあるとのことで、勤務時間中に睡

なる自分と比べたり……。

ただし、いくつか注文がないわけではない。たとえば用語の配列で、類語・派生語などを一括しているのはよいとして、そのグループと、一般の見出し語との扱いが同等で、やや見にくい所がある。たとえば、「低気圧」……「熱帯低気圧」の次に、同じ並びで「テレコネクション」と来るなど。

また、「夏日」、「日変化」などが観測・統計の項にあって、気候などの項には出て来ない、というのも不便である。この本は、よく知らない言葉をこそ、引くための本だから。

もちろん、全体を通じての索引は、和文・英文、それぞれに作っており、究極的には、そこを引けば解る。従って、索引をもっと引き易く、たとえば、ページの隅に印を付すなどの配慮が欲しい。

と、批判はしたが、手軽で、片手でも読めるのは嬉しい。実はここに綴った所感も、電車のつり皮の傍で生まれた。

最後に、疑問をひとつ。

「日陰曲線」というのがあって、それは、平面上に垂直な棒を立て、時々刻々の日陰の先端をつないで出来る曲線のことをいうのだそうだが、「日本では、春・秋分の日には直線、その他の日は双曲線となる」と解説してある。しかし、考えてみると、そのような日陰の先端の線が双曲線となり、春・秋分には直線となるという事実は、何も日本に限らず、一般に、どの緯度でもいえることではあるまいか。

(気象庁予報部 櫃間道夫)

学会刊行物ニュース

気象研究ノート

—雷特集— 第154号 1986年7月